

ドイツにおけるトルコ系女性の執筆活動とその受容 ——セーラン・アテシュとネクラ・ケレクを中心に¹——

渡 邊 紗 代／ベティーナ・ギルデンハルト

序 「ムスリム女性関連書籍」

「移民」と「統合」は現在のドイツ社会でもっとも注目されている課題の一つである。ほとんど毎日、新聞・雑誌・インターネットには関連記事が掲載されている。書籍市場にも「移民」・「統合」に関する著書があふれ、新刊書が相次いで出版され、よく売れている。その中でとりわけ目立っているのが、「ムスリム女性」の関連書籍である。『勝手に結婚を決められた』²や『われわれはあなたがたの娘であり、名誉なんかではない』³のように強制結婚などを暴くものが特に目につく。しかし、これはドイツだけに限った現象ではない。例えば、アヤーン・ヒルシ・アリの有名な『もう服従しない』⁴のオランダ語から多くの言語への翻訳が示すように、女性の立場から偏った「イスラームへの理解」という名の下で女性に強いている束縛を訴える書籍は、いまや国際的な注目を浴びているのである。

このように「ムスリム女性」への関心が増しているのは好ましい傾向とも言えるが、反面そこにはいくつかの「落とし穴」が潜んでいることも否めない。例えば、フランスに関して森千香子が鋭い指摘を呈している。「女性問題を扱った書籍における『スカーフ』『ムスリム女性』関連書の占める割合の高さは、フランスにおいて『女性問題』とはもはや『フランス女性』の問題ではなく、『他者』である『ムスリム女性』の問題であるかのような印象を与える。」⁵つまり、ムスリム女性への関心は偽善的な行為に他ならないのである。なぜなら、ムスリム女性を抑圧されている者として認識することによって、白人女性が自分をより自由で進歩した者として再確認できるとい

『言語文化』13-4：361-386ページ 2011.

同志社大学言語文化学会 ©渡邊紗代／ベティーナ・ギルデンハルト

メカニズムが、そこには含まれているからである。男性の場合も似たようなメカニズムが働いている。「フランス男性にとって『イスラームのスカーフ』は『自分たちはムスリム男性よりマシだ』と自らを正当化する道具として機能する」⁶。ドイツ人読者にもこのような指摘が当てはまるのだろうか。

本稿は森千香子のこの指摘を問題提起として、在独トルコ系女性による著書のドイツでの受容形態を調査しながら、別の「陥穽」にも着目したい。それは、「ムスリム女性関連書籍」を一つの現象として捉えること自体の問題性である。「ムスリム女性関連書籍」は本当に簡単に十把一絡げにしてもいいほど、等質なものなのだろうか。「ムスリム女性関連書籍」という言い方は「女性文学」や「外国人文学」といった概念と同じように、テキストの特質ではなく、作家の性や出身による分類で、一種の本質主義に基づいている。そのように扱うことによって、同一の範疇に属すると見做されているテキスト間の相違点のみならず、そのグループに属するテキストとそれ以外のテキストとの関連性も等閑に付されている。さらに、「文学作品」とも、「科学的な調査」とも看做されないそれらの著書は軽視されがちである。本稿では、どうして個々の作品が「テキスト群 (Textgruppe)」として扱われているかという要因を探ると同時に、「ムスリム女性関連書籍」に一括りされているテキストの多様性を明らかにしたい。

とりわけセーラン・アテシュ (Seyran Ateş、1963年生まれ) とネクラ・ケレク (Necla Kelek、1957生まれ) の著書に焦点を当てることにする。彼女たちは、2006年当時のドイツ連邦内務大臣ヴォルフガング・ショイブレ (Wolfgang Schäuble) によって創設されたイスラーム会議 (Islamkonferenz) に招聘されている。特に、彼女たちの最新の著書、セーラン・アテシュの『イスラームには性的な革命が必要である一論難書』(2009年)⁷とネクラ・ケレクの『天国への旅—イスラーム監視人との私の戦い』(2010年)⁸は物議を醸した。なぜなら、タイトルの「論難 (Streit)」という言葉がはっきりと示しているように、本書はイスラームの名の下で女性抑圧や理不尽なことが行われていることを、激しい議論や身の危険も顧みずに批判しているからである。

しかしながら、彼女たちの著書は新聞などで大きくあげられているものの、ほとんど学術的に分析されることはない。日本ではまだあまり知られていな

い二人であるが、彼女たちに着目することによって、「ムスリム女性関連書籍」や「移民」のみならず、ドイツ社会が抱えている根本的な課題に関しても数多くの発見を得られるとの考えから、本稿で考察を試みたい。

共通点が目立っているこの二人こそ、「ムスリム女性関連書籍」の多様性を証明するのにうってつけの人物である。というのは、彼女たちの最新の書物が出版されるまでの道のりがかなり異なっているからである。セーラン・アテシュは自伝的な作品が、ネクラ・ケレクは博士論文が出发点である。そこで、彼女たちの著書を対比させ、その特徴とお互いの相違点を浮き彫りにしながら考察を進めることにする。

I. セーラン・アテシュ『われわれの居場所はどこ？』と『火への長い旅』⁹

『われわれの居場所はどこ？』

アテシュは1983年20歳の頃、ドイツ人編集者の指導の下、友人とともに「アイゼ」と「デフリム」というペンネームで『われわれの居場所はどこ？二人のトルコの少女が語る』¹⁰という書籍をラムフ（Lamuv）出版社から出版している。タイトルの通り、在独トルコ人の二世が抱えている問題が主題となっている。1975年に創立されたラムフ出版社は、ドイツの出版業界で「だれも出版したくない作家たち」¹¹を中心に編集活動し、南米・アフリカ・アジアの作家を積極的に取り上げ、抑圧されている者の声をドイツ人読者に届けようとしていた。

1980年代に出版されたものとして、ギュンター・ヴァルラフ（Günter Wallraff）の著名な『最底辺』（1985年）¹²がある。トルコ人に扮し、身をもってドイツ社会を「最底辺」から観察したヴァルラフのこのルポルタージュは、『われわれの居場所はどこ？』といくつかの共通点がある。両者ともドイツ社会における弱者に対して、一般市民の目をむけさせようとしている点である。しかし、正義の味方であるはずのこれらの書物は構造的な力関係には鈍感である。『最底辺』は外国人に「連帯感」や「同情」をもち、ドイツの一般市民の「無関心」や「見て見ぬ振り」を暴きたてようとしているが、ドイ

ツ社会の犠牲者、声なき弱者としてトルコ人を扱い、まるで後見人のように振舞っている筆者の姿勢は否めない。似たような構造は『われわれの居場所はどこ?』にも見える。二人のトルコ人少女の「生の声」を届けているのは、ドイツ人の大人の編集者であるからだ。『最底辺』も『われわれの居場所はどこ?』も、70年代の激動の精神を引き継ぎ、一般社会に進んでいる保守化に抗する著書であり、70年代・80年代に左翼的な環境の中で興隆したルポルタージュ文学の典型的なものだと言えよう。

それに対して、『火への長い旅』は『われわれの居場所はどこ?』と異なり、アテシュが初めて本名で発表した著書である。これは、幅広い一般読者層をターゲットにしているローヴォールト (Rowohlt) 出版社から2003年に出版された。

『火への長い旅』

1) テキストの意図と語りの構造

『火への長い旅』という題名は本人の名前に由るものである。「セーラン」は「長い旅、遠足、祝い」を、姓の「アテシュ」は「火、熱」を意味していることが29頁に明らかにされている。著者がユーモアを込めて「義務を負っている名前」とコメントしているように、このタイトルはアテシュが送ってきた人生の代名詞にもなっている。この中で綴られている抑圧された少女が独立した女性へ発展する様子はまさに激しい(「熱い」「旅」を表しているようである。

著書の本文の前に献詞として「自由で自らの決定による人生を送れない、または送るのを許されていないすべての女性のために」と記されている。この献詞には自分も昔その一人だったという趣旨がほのめかされている。同時に、表紙に載っている、大胆にカメラに向かって本人の写真が、今では自立や自由を獲得したことを暗示している。執筆の当時(2003年)は、アテシュが弁護士として活躍した時期でもある。

同じく、「昔」と「今」という対立は語りの構造にも現れている。語り手になっている「私」は過去についての語りの中に、つねに現在の立場からの解説とコメントを付け加えている。例えば、両親が出稼ぎ労働者としてドイツに移住し、アテシュが伯父の家庭に預けられた時のことについて、次のように語っている。

不思議なことに、私が母に一人にされていた一年間についての思い出はあまりない。たぶん、その期間があまりにも大変だったからだろう。しかし、ドイツがガストアルバイター（出稼ぎ労働者）¹³を募集している間、親にトルコに置き去りにされ、親戚に酷い扱いを受けたのは、決して私だけではない。私と同世代の多くの人々は、このトラウマを克服するために、今カウンセリングに通っている。これは、移民の子供たちの世代的なトラウマと言ってもよいかもしれない。親は私たちを置いてドイツへ渡り、しばらくして呼び寄せたが、そのことについて一度もわれわれと話し合ったことがない。その経験が私たち子供にとってどれだけ大変だったのかはあまり考えなかったようである。時間もなく、教養も分別もなかったからだろう。親は私からの非難もあまり理解していないようだった。でもかなり時間が経って、親の視点から当時のことを語ってもらって、ようやく彼等を許すことができた。決して軽い気持ちでそれをやったのではないということが分かったからである。¹⁴

ここで著者は、傷ついた子供の経験に語りの重点を置くのではなく、その経験を歴史的な文脈に置いている現在の自分の立場に重点を置いている。酷い経験をした可哀そうな自分を語っていても、自分は「弱者」であるという印象を与えない。つねに、それを克服した現在の自分がいる。この解説からは、著者がドイツへ移住してきた人たちの心理や背景などをあまり知らないドイツ人を読者として想定しているということが推測できる。この著書は抑圧されている女性に捧げられながらも、一般のドイツ人読者に向かって語っているのである。著者は決して、ドイツ人読者の前には「犠牲者」として登場

しない。『火への長い旅』でアテシユは時間軸に沿い、父と母の家族の事情から語りをはじめ、現在に至るまでの波乱万丈な道のりを全12章にわたって綴っている。トルコのイスラームの伝統を重視する抑圧的な家庭に育った彼女は、ドイツの学校で性別の民主主義や自由について学ぶ。そこから生じる家族との葛藤、家出、「女性店」¹⁵での仕事とその最中に銃撃された事件、納得いかない訴訟と被告人の無罪判決などを描写している。しかし、その目的は同情を呼ぶことではない。在独トルコ人のコミュニティの在り方とドイツ社会における理不尽さに対して疑問を投げかけているのである。非西欧社会に対して常に啓蒙者として振る舞いがちなドイツ人を、アテシユはここで啓蒙しようとしている。ドイツ人に情報を与えることによって、改善を促そうとしているのである。著書の後半では、移民の女性を弱い犠牲者として認識する傾向をはっきりと批判している。

女性の移民がドイツのフェミニストに本格的に発見されたのは、70年代の終わりごろである。それは、夫、息子、すべての親戚の男性によって抑圧されている、イスラーム社会の弱い犠牲者としてである。もちろん、われわれは抑圧されていた。しかし、犠牲者であったばかりではない。にもかかわらず、ドイツのフェミニストたちは、それをあまり認めようとはしなかった。なぜなら、様々な催し物のためにおいしい料理を用意してくれるトルコの女性たちはあまりにも都合がよかったからである。もしも対等な者と認めたなら、その役割分担を変える必要があったはずだ。¹⁶

男女の伝統的な役割分担の克服を掲げながら、自分と「他者」である移民女性の間でそれを再生産し、移民の女性を弱い犠牲者としてしか認識していないドイツの女性の態度が確かに存在している。アテシユがここで指摘していることは、本稿の序章で紹介した森千香子がフランスの白人読者に関して述べていることと一致している。ここにはっきりと現れている「オリエンタリズム」、つまり非西洋社会の人を絶対的な「他者」として捉え、西洋の優位を当然視する思考は、男女平等を目指す「フェミニズム」の不徹底に繋がって

いる。ところが、皮肉なことに、アテシュが「他者」扱いに関する批判を述べているこの著書自体は、ムスリム女性を「他者」として認識させる「テキスト群」の一部として出版されているのである。

2) レイアウトと出版社の戦略

表紙にはタイトルと著者名と並んで「あるトルコ系ドイツ人の話 (Die Geschichte einer deutschen Türkin)」と書いてある。ドイツ語の「eine」(ここではあえて日本語としてはやや不自然な「ある」と訳した)という不定冠詞は、この話は本人に限ったものではなく、多くの在独トルコ系女性にも当てはまっていることを暗示している。「自伝 (Autobiografie)」という言葉がここで使われていないことは、出版の時点では、アテシュの知名度がまだ低かったことに由るものだろう。その結果、一人の個人の人生という側面よりも、その人生の代表性、つまり、多くの在独トルコ系女性にも似たような経験があるということを強調していると考えられる。他の出版社で出版されている、アテシュと同様に自分の経験を綴ったトルコ系女性による著書の多くも、似たような表紙である。序章ですでに述べた、ブランヴァレット (Blanvalet) 出版社から出版されたアイゼの『勝手に結婚を決められた』の表紙には「ある在独トルコ人が語る (eine Türkin in Deutschland erzählt)」とあり、ピーパー (Piper) 出版社のインチの『自分の嘘で窒息して!』¹⁷⁾にも全く同じ文言が表紙にある。アイゼとインチは匿名を希望しているので、本人の顔だとは限らないのだが、表紙には女性の顔が映っている点もアテシュの著書と酷似している。このように、様々な出版社において、似たような出版パターンが定着したわけである。このレイアウトによって、テキストが「生の声」でありながら「典型的」なものであるという要素が強調されていることがわかる¹⁸⁾。同時に、ドイツ人読者にとっても、聞き慣れない名前からはすぐに著者の性別を判断することはできないが、著者の顔写真が表紙に載せられることによって、「女性」による書物であることがすぐに分かるようになっている。そのパターンを端的に示しているのが、既に1999年に出版されたセーラプ・チ

レリの『われわれはあなたがたの娘であり、名誉なんかではない』である。1999年、つまり、ブームが起こる前には表紙には写真ではなくスケッチが載っているが、2006年の再出版の際には、著者の顔写真が載せられ、変更されている。

多くの書物がアマゾン（Amazon）のようにインターネット上でも販売されることによって、その表面的な共通性はさらに強調されていく。上記の著書の一冊を注文すると、「この本にも興味をお持ちかもしれない」という表示が自動的に現れ、他の「ムスリム女性関連書籍」が紹介され、更なる購買が促進されていく。芋蔓式に、それらの書籍がすべて繋がっているかのような印象を受ける。書籍のカテゴリ化は販売戦略であり、出版社の意図によるところが大きいと言ってよいだろう。様々な出版社がその発行に踏み切ったのは、こういった書籍が確実に売れると確信したからに違いない。では、どうしてその確信は得られたのだろうか。セーラン・アテシュは『火への長い旅』の中で次のような見解を呈している。

2001年9月11日のニュー・ヨーク同時多発テロ事件のあと、人々は急にアフガニスタンの女性に関心を持ち始めた。しかし、その女性たちはこのテロ事件よりずっと前から非人間的な生き方を強いられていた。突然沸いてきた関心というのはかなり虚偽的である。制御できなくなったアフガニスタンでの戦争を正当化するために、アフガニスタンの女性の部分的な解放が都合のよい理由になっただけである。¹⁹

同時多発テロ事件とそれに続くアフガニスタンでの戦争に伴い、タリバンによる女性抑圧に関する報道が増え、一般的な関心は増していった。その一環として、アフガニスタンのみならず、イスラームによって「抑圧」されているすべての「可哀そうな女性」の身の上話が盛んになった。そのグループ化、ひいては他者としての認識に繋がるレイアウトの発端がそこにある。その典型的な受容は「同情」である。例えば、アイゼの『勝手に結婚を決められた』のカバーの宣伝文には「ドイツの中に、トルコがあるという並存社会（Parallelgesellschaft）²⁰からの衝撃的な運命の報告－勇敢で、むきだして非常

に感動的な語り」とある。この台詞に使われている単語「衝撃的」と「感動的」とは決まりきった「Betroffenheitsjargon」にほかならない。（「Betroffenheitsjargon」とは偽善者（Gutmenschen）が自分の道徳をこれ見よがしに表すのによく使う、決まりきった表現に対する揶揄的な呼び方である。）

しかし、その関心がどんなに偽善的かつ嘘めいていても、この気運こそムスリム女性に発言の場を与えたということは否めない。アテシュは大学卒業後、ドイツ人の共同執筆者の力を借りずに『火への長い旅』を執筆したが、「アイゼ」や「インチ」というペンネームを使った女性はドイツ人ジャーナリストの協力を得て執筆をした。ドイツの一般社会において急向上した関心や「売れる」という出版社の確信がなければ、それらの書物は生まれなかっただろう。しかも、「ムスリム女性関連書籍」の出版の背景には、アフガニスタンでの戦争という政治的な要素の他に、「文化的な」または「文学的な」要素も含まれている。特に、1977年にドイツで流行りだした「女性文学」を抜きにしては、「ムスリム女性関連書籍」の出版事情と受容形態は理解できないだろう。

3) 「テキスト群」としての扱い：「ムスリム女性関連書籍」と「女性文学」の関連性

ドイツでは、1970年代に学生運動の延長線上で、女性解放運動が台頭した。平等や差別のない世の中のために戦いながら、男女関係では常に優位に立とうとする男性に対して、女性の同志たちは「プライベートこそ政治的である」というスローガンで不満を表現し、日常生活、家庭、パートナーシップにおける女性差別、女性抑圧を暴き立てた。その影響によって、女性による作品が数多く発表され、その多くはプライベート、つまり、自伝的な身の上話となったのである。これらの作品は概して「女性文学」と呼ばれることになった。ヴァイゲル（Weigel）は、その「女性文学」の特徴として「美学的な無邪気さ（ästhetische Unschuld）」を挙げている。20世紀以降、文学の領域では、

「主体」というカテゴリーが疑問視され、「写実主義」、つまり「現実」を「言葉」でそのまま「描写」できるという信奉が徹底的に論破され、「言葉」に対する懐疑は20世紀のドイツ文学の底流をなしていた。しかし、1970年代から広まった「女性文学」はその伝統を引き継いでいない。大体のテキストは「著者」＝「語り手」＝「主体」という構造に基づき、19世紀の「写実主義」に従っている。現実をそのまま伝えるという「直接性 (Unmittelbarkeit)」と「真性 (Authentizität)」がその特徴である。ヴァイゲルはその語り方を女性が社会生活では長い間得られなかった「主体性」への憧れと解釈している。もう一つの特徴は、「著者が自分の話を女性の典型的な経験として認識している」ということである²¹。ヴァイゲルがドイツの女性文学に関して指摘していることは、そのまま『火への長い旅』、ひいては「ムスリム女性」の身の上話のテキストにも当てはまる。すなわち、レイアウトなどの外的な要素に「ムスリム女性関連書籍」を「テキスト群」として捉える態度を表わすだけでなく、著者自身の語り口という内的な要素も、ドイツの1970年代以降の「女性文学」の伝統を引き継いでいるのである。

もちろん、インゲボルク・バッハマン (Ingeborg Bachmann) のように、そのパターンに当てはまらない、「主体性」の拒否をテーマにしている女性作家も存在する。小説『Malina』で、安定しない語り手の設定によって、女性の経験を陳腐な「言葉」や「構造」で語るのが不可能であることを暗示している。同じように、ムスリム女性の著書の中で、エミネ・セヴキ・エツダマ (Emine Sevgi Özdamar)²²のように、自伝的な題材を扱っても「言葉」を意識して、陳腐な語りの「型」を避ける作家もいる。そのため彼女の作品は「群」の中には収まらず、独立した「文学作品」と捉えられている。しかし、「ムスリム女性の自伝」は「文学作品」としての受容を望まない。読者に感銘を与えるというよりも、自分の個人的な経験は多くの女性が共有していて、それを「書く」ことによって、何かを動かしたいという意図が働いているわけだ。

1977年以降、女性解放運動の気運にのり、ドイツの代表的な出版社のほとんどが「女性」に関するシリーズを出している²³。シリーズとして発表することは、女性読者というターゲットを絞りやすく、出版社にとっては、作品を

個別に出版するより読者を獲得しやすく、読者側にとっても、興味がある本を見つけやすいというメリットがあった。これに対して、シリーズ化に伴い「女性文学」が特別扱いされ、「文学」と「女性文学」が根本的に分離されていることが指摘され批判されていた。しかし、ヴォルスベル（Vorspel）が展開しているように、特別扱いやシリーズ出版のおかげで、女性に発表の場が与えられたこともまた事実であった²⁴。同じメカニズムが30年後の「ムスリム女性関連書籍」にも見られる。シリーズこそはないものの、似たようなレイアウトによって、カテゴリー化が行われている。ムスリム女性の身の上話は、ドイツの「女性文学」の変奏曲とも言える。ドイツの「女性文学」の「語りの型」とその確固たる読者層がなければ、ムスリム女性の自伝的な作品の出版もあり得なかつただろう。白人女性読者による受容に関しては、陳腐な「同情」または「われわれは既に卒業した」という優越感が確かにあるが、しかし、「連帯感」のようなものも否めない。セーラプ・チレリやアイゼの著書には強制結婚などから逃げようとする女性の援助活動を行うグループの情報が追記されている。人権団体テル・ドゥ・フェム²⁵はムスリム女性の自伝的な作品の出版を積極的に支持して、ブランヴァレット（Blanvalet）出版社の協力を得ている。

要するに、「テキスト群」としての出版は諸刃の剣と言ってもよいだろう。「群」だからこそ、政治的・社会的な影響力があるというメリットがある。「型」が出来上がったからこそ、特定の読者層が成立していき、文章を書くことにあまり慣れていない女性たちが自分の経験を表現できるようになった。しかし、その反面、著者が個人よりも「ムスリム女性」として認識され、個々の作品というよりも、概して「抑圧された女性の身の上話」として受容されるというデメリットもある。しかも、その「型」に従わない著書も著者がムスリム女性であるだけにその延長線で見られがちである。そのパターンに従っていない著書の一つは、ネクラ・ケレクの『ほろにがい故郷』である。

II. ネクラ・ケレク 『ほろにがい故郷』²⁶

『ほろにがい故郷』は自伝的な要素を含みながらも、語りの構造といい、レイアウトといい、上記に紹介した「ムスリム女性の関連書籍」という「群」

とは異なっている。そもそもネクラ・ケレクの執筆活動の発端は、「身の上話」ではなく、トルコ出身の生徒たちにとってドイツの日常生活では、イスラーム教がどんな意味をもっているのかを調査した「日常におけるイスラーム教」という博士論文である。この博士論文に続き、二つの社会学的な調査に基づいた著書を出版している。一つは強制結婚を強いられ、ドイツに「輸入されている」トルコの女性に関する『外国人花嫁』（2005年）²⁷、もう一つは、ドイツの社会に馴染めず、犯罪を起し、刑務所に入っている男性に関する『放蕩息子』（2006年）²⁸である。いずれの著書も社会学的な方法を用いた調査報告である（詳しい紹介はⅣとⅤ章）。様々な人々とその経験を紹介しているので、これらの著書の場合も「真性」や「直接性」は大きな役割を果たしているが、「ムスリム女性関連書籍」と異なり、扱っているテーマに対して、著者自身は一定の距離を置いている。

『ほろにがい故郷』（2009年）では、個人的な経験が綴られているのだが、サブタイトル「トルコの内部からの報告（Ein Bericht aus dem Inneren der Türkei）」が示しているように、この著書も、単なる身の上話ではなく「報告書」である。トルコの国旗と同色である赤い表紙には顔写真は載っていない。顔写真は著書の内容の紹介文と共に背表紙に載っている。この紹介文は著者自身によるものである。

ほろにがい故郷、この矛盾に満ちた表現は私の出身国との関係を見事に表している。私にとって非常に身近で愛しいものが、トルコにはたくさんある。詩や物語、歌、輝いているボスポラス、あるいはおいしい食べ物への誘惑。しかし、同時に私を憤慨させるものもたくさんある。男性の支配下に置かれ、政治によって見捨てられている東アナトリアの少女たちと女性たちの宿命。「トルコ主義」という名の下で少数派民族に対して犯された罪を記憶にとどめようとしないトルコ社会の無責任な態度。本書は、トルコという政治的に引き裂かれた国のメンタリティや伝統をより深く理解しようとしている。そして、今日までのトルコ、これからのトルコの在り方という問題に対して答えを見つけようとしている。

ここでのキーワードは「深い理解 (EinblickeとEinsichten)」である。ケレクは批判すべき事情を描写するのではなく、その背景を探ることを目的としている。その際、巧みに個人的な経験とトルコの歴史、社会、政治に関する解説を織り交ぜている。「ムスリム女性関連書籍」の場合、個人的な経験を「直接に」語ることこそ、その特徴であり、本に説得力をもたらししているのだが、『ほろにがい故郷』の場合は、トルコの歴史などの「硬い」課題を具体的に解説する際、臨場感をもたらすために個人的な体験が持ち出される。つまり、直接性や真性は描写の目的ではなく、手段である。その意味で、「ムスリム女性関連書籍」とは一線を画している。

以上に述べたように、セーラン・アテシュも『火への長い旅』に続いて、2007年に『多文化の幻想』²⁹という著書を出版しているが、その著書で、「ムスリム女性関連書籍」というパターンから離れ、ネクラ・ケレクと似たようなスタンスからトルコや在独トルコ人の並存社会の理不尽さを扱っているのである。

Ⅲ. セーラン・アテシュ『多文化の幻想』と ネクラ・ケレク『外国人花嫁』

次にアテシュの『多文化の幻想』とケレクの『外国人花嫁』を比較してみたい。アテシュの『多文化の幻想』は彼女の3冊目の著書である。これは、前述したように、自叙伝『火への長い旅』の4年後に出版され、女性の権利を守るためのイスラームのシステムとの戦いをより顕著に表した作品のひとつとも言える。アテシュはこの著書の中で自分の立場を次のように説明している。

統合、移民国としてのドイツ、イスラームというテーマになると、左と右という従来の政治的な分類をもはや当てはめることはできない。私はもともと左翼でフェミニズムを支持しているのだが、このようなテーマの場合、私の主張を理解してくれるのは、意外と保守派の男性のようだ。それに対して、左翼の支持者は自分のイデオロギーを固持

し、その結果として、怪しげな同胞から支持を得ることになるのだ。³⁰

つまり、アテシュ自身はイスラームのシステムに対して批判的であり、そうした立場から、強制結婚をはじめ、名誉殺人、移民の家族間での家庭内暴力をテーマとし、抑圧されたムスリム女性に焦点を当てている。では、どのような点をアテシュは批判しているのだろうか。具体的な内容をみてみると、強制結婚をさせられる少女の多くが12歳から18歳であるという。なぜ低年齢にもかかわらず、このような婚姻が認められるのか。それは、裁判所の決定によって少女の年齢を後で決めることができるため、低年齢でも結婚が可能となっているからである。このようなことが起こりうる背景には、トルコでは子供の誕生を届け出る義務がないことがある。しかし、トルコがEUへの加盟を望むのならば、このような状況を是正するべきであるとアテシュは指摘している³¹。また、娘をドイツに定住しているトルコ人男性と結婚させる家族の多くが経済的な要因を抱えていることを示し、このような「輸入された」あるいは「売られた」花嫁たちは、後にトルコで暮らす家族に仕送りをしている現状もあると指摘している³²。さらに、宗教としてのイスラームについての言及もあり、イスラームがヨーロッパにおいて承認されるためには、その政治的な側面を取り除き精神的な次元にとどめるための改革が必要であると主張している³³。そして巻末では、ヨーロッパに移住した人間は、「ヨーロッパ的」な文化に対応していくこともできるし、またそれが必要であるとの指摘でまとめている³⁴。

このようにアテシュは、様々な側面からイスラームとイスラームの男性から抑圧されているドイツに移住したトルコ人女性に焦点を当ててその現状を報告している。しかし、主な焦点は確かにドイツに置かれているのだが、そこだけにとどまっただけではない。ドイツだけでなく、ヨーロッパ全体へと視野を広げた考察がしばしばみられる。それは、トルコのEUへの加盟についての言及であったり、移民たちに移住先であるドイツの「ドイツ的」な文化ではなく、「ヨーロッパ的」な文化への適応を促したりしている点によく表されている。この点から、在独トルコ人女性が家庭やトルコ人コミュニティの

中で抑圧され、民主主義の平等から排除されているという問題を、ドイツとトルコの間だけの、あるいはドイツ人とトルコ人の中だけの「ムスリム女性特有の問題」や「移民女性特有の問題」という枠組みにとどめず、トルコとドイツを通し、ヨーロッパ全体へと問題提起をしていることがわかる。そういった意味から、アテシュのこの著書は、多くの移住者を抱えるヨーロッパ、ひいては、世界各地の移民、女性、イスラーム、そして、統合についての議論に一石を投じる一役を担っていると言えることができる。

一方、ケレクの『外国人花嫁』は2005年に出版された博士論文に続く彼女の2冊目の著書であるが、これはドイツでのトルコ人の生活を報告したものである。アテシュと同様に、彼女は幼少期に、イスラームの伝統や風習に基づいた「男性的」で家父長的な家庭で父親から抑圧された扱いを受け、ムスリム女性ならではの経験を背景にし、自分自身や自分の家族の話を含め、多くのトルコ人のムスリム女性、特に若い女性にインタビューを行い、その経験談を交えてドイツにおけるトルコのイスラームの実情をこの著書の中で報告している。その中で最も重点的かつ批判的に述べているのが、トルコからドイツへ「輸入される」花嫁についてである。確かに彼女は、トルコでは男性が自身の愛情からではなく、母親が探してきた花嫁と結婚するという風習が一般的に行われているということは知っていたが、強制的にトルコからドイツへ「輸入される」花嫁が数多く実在していることを聞き知った時、このような不条理が慣習化されていることに驚き、これを現代の奴隷制度に譬えている³⁵。そして、トルコからドイツへ「売られた」多くの花嫁からケレクが聞いたところによると、典型的な「輸入花嫁」とは、5、6年間だけ読み書きを習った18歳くらいの農村の出身者が多く、ドイツ語やドイツに関する知識もまったくなく、ドイツに定住するトルコ人男性のもとへと強制的に輸出されている。また、彼女たちは、ドイツへ移住した当初はドイツでの滞在権をもたないため、夫となる男性やその家族に完全に依存した生活を送らなければならないと、さらに、出産後でさえも、ドイツ社会と接触をせずに家族間、もしくは、狭いトルコ人コミュニティの中だけの閉ざされた世界で生活していくことになる³⁶。

この「輸入花嫁」こそが、在独トルコ人のドイツ社会への統合の失敗の要

因のひとつになっているのだとケレクは指摘している。併せて、在独トルコ人のコミュニティや家族間では、トルコ人女性たちの自由が搾取され、抑圧され続けていることにも批判が向けられている。これらが、いわゆるドイツ社会で問題とされている「並存社会」の一面である。まさに、ドイツでドイツ人とトルコ人が互いに交流をし、相互扶助のもとに「共存」しているのではなく、互いに交流することなく無関心のままだ存在し続けるだけの「並存」状態なのである。

このような彼女の批判は、ドイツ社会の基礎ともなっている自由、民主主義、啓蒙、世俗的な規律、市民社会という観念に基づいたものである。つまり、ドイツ社会での法律や規律をトルコ人移民が順守することを前提として述べられている。この著書からは、ドイツでのトルコ人移民の生活やイスラームの実情を移住者の内部の声として、ドイツ人読者は知ることができるという側面が確かにある。しかし、重要なことはその一面だけではない。「多文化主義」という名の下で、ドイツの民主主義に相反するトルコ人移民たちの「輸入花嫁」という制度をドイツの社会が黙認してきたという現状そのものが議論され、着目されるべき問題であると言える。なぜなら、トルコ人移民たち（特にトルコ人移民女性）がトルコ人コミュニティの中だけの「内側」の世界から脱出せず、その「外側」の世界であるドイツ社会に接触せずに並存していくことは、閉鎖されたコミュニティを構築することに他ならず、ドイツ社会が目指す他者との共存という統合の形態からは逸脱しているからである。それにもかかわらず、ドイツ社会側が、このような並存社会が構築されていくことを黙認し続けることは、他者への寛容という姿勢を表面にまとっただけの虚構の統合社会への道を支持し歩んでいくことにつながってしまうのである。こういった理由から、ケレクのこの著書は、トルコ・イスラーム文化への認知度を広めると同時に「多文化主義」の幻想からの脱却を促すひとつであるとも言える。

以上指摘したように、アテシュとケレクはトルコ人移民女性として、ムスリム女性として、自身の経験をもとにトルコ人移民女性やムスリム女性の現状を報告し、現状の打開策を提言している。移民女性に焦点を当て、イスラームに対して批判的な姿勢をとっている点は共通する部分である。それゆえに、

これらの著書はムスリム女性たちの経験や声を綴った「ムスリム女性関連書籍」とひとくくりにされがちである。しかし、どちらの著書も、移民女性のムスリムとしての経験談だけをまとめているのではない。手法は若干異なるものの、両者とも、ドイツにおける移民女性の現状を報告しつつ、最終的には表面的な「多文化主義」に対しての痛烈な批判、移民がドイツ社会に統合することに失敗していることについて言及されている。つまり、これらの著作を「ムスリム女性関連書籍」とだけ位置づけることは強引であり、ある種の見落としであるとも言える。移民、イスラーム、ムスリム女性、統合、「多文化主義」という様々な要因を絡み合わせた、現在の「移民社会としてのドイツ」に問題提起をする著書のひとつだと位置づけできるのである。

IV. 『多文化の幻想』と『外国人花嫁』に対する批評

では、『多文化の幻想』と『外国人花嫁』の出版後どのような反響がドイツ社会ではあったのだろうか。アテシュは、ムスリム女性の権利のための「戦士」と呼ばれていたり、イスラームやムスリムの男性に対して批判的であるため、「攻撃的」と捉えられたりする傾向がある³⁷。これはドイツの社会やメディアだけがそのように彼女を定めるのではなく、いくつかのイスラーム組織や団体なども「イスラームの敵」や「反イスラーム」という位置づけをしている。これは、ドイツへ移住している女性移民の保護を目的とした弁護士活動や支援活動をアテシュが「女性の店」で行っている最中に銃撃されたこと（1984年）や彼女と彼女の家族への殺害の脅迫があったこと（2009年）などからよくわかる。これらは、つまり、彼女の著書や言動が社会に対して多大な影響を与えているということである。

一方の『多文化の幻想』に対してはどのような批評があるのだろうか。例えば、2007年11月の新聞Die Weltでは、この著書は、読者を驚かせ、説得することに成功していると評されている³⁸。その一方で、政治家学者のアルミン・プファール・トラウバー（Armin Pfahl-Traugber）は、学術的な作品ではなく、弁護士としての彼女の経験談にしかすぎない薄っぺらな文学作品であると批判している³⁹。

それに対して、ケレクもアテシュと同様にイスラームに対して批判的な姿

勢をとっているため、ドイツのメディアからは「聖なる戦士」と呼ばれている。ドイツにおいて統合やムスリム女性の問題が議論される際、その代表であるかのように「アテシュやケレク」と並べて名前が挙げられるのは、このような彼女たちの姿勢や言動が少なからず影響し重要な存在となっているからである。

次に、『外国人花嫁』に対してはどのような批評があったのかをみていくことにしたい。まず、この著書は彼女のベストセラーとなり、2005年に Geschwister-Scholl賞を受賞している。具体的な批評には次のようなものがある。2005年1月に当時のドイツ連邦内務大臣オットー・シリー（Otto Schily）は、ドイツの代表的な週刊誌Der Spiegelにて、強制結婚は無視されるべき問題ではないと述べ、ケレクのこの著書は統合の議論が今までよりもさらに徹底的に行われることに寄与する重要な一冊であるという見解を示している⁴⁰。2005年3月の新聞Die Zeitでは、ケレクとアテシュは、トルコ人移民女性たちに法の保護が及んでいないことを、少数派の問題ではなく民主主義への挑戦と捉え、それと戦っているのだと評されている⁴¹。

その一方で、批判もある。『外国人花嫁』は、ムスリム移民女性へのインタビューを基に報告しているとされているが、これらは少女や女性たちの個人的な経験を誇張して語ったものにすぎず、データや数値も科学性が欠如していると批判されている⁴²。さらに、『外国人花嫁』の出版の3年前に発表された「イスラームと日常」をテーマとした彼女の博士論文では、トルコ出身の若者にとって社会的なアイデンティティ形成のためにイスラームが存在しているのだと述べられていたにもかかわらず、『外国人花嫁』では正反対のことが述べられているという批判も付け加えられている。このような批判に対して、2006年2月にDie Zeitでケレクは次のように反論している。批判者たちは、ある種の結婚市場でもある、強制結婚の存在を否定もしていない。本当に、アナトリア地方でこのような強制結婚が存在していないと言うつもりか？と⁴³。つまり、ケレクは、アナトリア地方で行われている強制結婚が習慣化されたものではなく、個人的な体験にすぎないものであるのかと、反論しているのである。

データや数値に科学性が欠如しているという批判があるが、これはより正

確な数値として証明する方が困難なのではないだろうか。なぜなら、強制結婚や家庭内暴力によって抑圧されている女性たちが公に立場を表明し、その存在を主張できる社会の仕組みがドイツの移民女性の周辺で整っているとは言い難いからである。さらに、そのような告発を十分にできるだけの言語能力や社会的知識をすべての移民女性が身につけているとも言い難い。それゆえに、ケレクのこの著書はいわば告発本として出版されるに至ったはずである。このような観点から、実際の数値はさておき、強制結婚や家庭内暴力が現実存在している状況を把握し、トルコ人コミュニティへの批判やそれを黙認してきたドイツ社会への批判を新たな問題提起のひとつとして捉えなおすことに意義があるのだと言うことができる。

『多文化の幻想』と『外国人花嫁』に対する評論家や出版社などの外部からの批評を大別すると、まずひとつ目は、ムスリム移民女性たちの抑圧された姿についての勇気ある報告書であり、告発本であるという好評である。そして、ふたつ目は批判であるが、科学性が欠如した自身の経験談に基づく私的な文学作品にすぎないというものである。アテシュの『多文化の幻想』とケレクの『外国人花嫁』は明らかにその「型」に従わないにもかかわらず、この批判からもわかるように、それらの著書は上に述べた自伝的な作品に還元されて、その延長線上で認識されてしまうのである。このように「ムスリム女性」、「移民女性」として表象され「個人の経験談」として認識されてしまうことに、現代のドイツの「移民問題」を考察するにあたっての「陥穽」があるのだ。

アテシュやケレクの例が示すように、ムスリム女性による著書は決して、「身の上話」ととどまるわけではない。さらに、エツダマのように「小説」、つまり文学作品の形式で自らの経験を基にした著書を次々と発表しているムスリム女性や移民女性たちを考えると、その手法やストーリーをはじめ、登場人物のキャラクター設定など、まさに多様性をおびている。この多様性こそが現代のドイツの移民についての分析を行う際のキーワードとなるはずである。つまり、一方向からの見方で解釈してしまうと偏った認識にしかつながらないからである。この構図が、「ムスリム女性関連書籍」という、作家を性や出身だけでひとくくりにしてしまうことに表われているのである。

V. ネクラ・ケレク『放蕩息子』

さらに、以上述べてきたような「ムスリム女性関連書籍」と呼ばれる書物の多様性を示す一例のひとつとして、ケレクの『放蕩息子』についても少し言及しておきたい。ムスリム女性や移民女性は自分の経験しか綴れない、「女性問題」に関してしか発言できないという偏見が、このケレクの『放蕩息子』の発表で覆されたはずである。『放蕩息子』は、『外国人花嫁』の出版の翌年である2006年に出版されているが、『外国人花嫁』とは対照的に、ムスリムの男性たちに焦点が当てられている。ムスリムの男性たちにインタビューを行い、その男性たちのライフストーリーが報告されている。そこには、殺人者からモスクのイマムまで、名誉や恥、尊敬の念といったトルコのイスラーム・システムに則ったムスリム男性の姿がある。その男性の様子が次のように綴られている。

公の場から女性を締め出し、抑圧している「システム」。そのシステムの利益は誰のものなのかを聞かなければならない。男性たちであろうか？ 家父長たちであろうか？ 女性の抑圧が、彼ら、または彼らの息子たちに果たしてどんなメリットをもたらしているのだろうか。一見すると、トルコ・イスラーム的な男性たちはかえって敗者のように見える。というのは、学校で落ちこぼれているのは主に少年だったり、暴力の問題を引き起こすのもトルコ系の青年だったり、ドイツの刑務所に入っているのも主にムスリムの男性だったりするからだ。それはなぜか。差別や進学チャンスの欠如が一因なのか。それともイスラーム教と封建的な部族主義的文化が（ドイツで）だんだん拡がっている並存社会に起因するものなのか。

その答えを突き止めようと思うなら、(イスラームの)個人と共同体、家族と伝統、暴力と服従、名誉と恥の関係に着眼し、不快な現状を直視せざるをえない。しかし、久しくこういった問いかけは無視されてきたのだ。それは移民のみならず、ドイツの社会にも悪影響を及ぼしていたからである。

詳しく調査すると、イスラームの共同体にとって絶対的な規則、つまり尊敬、名誉、恥などの価値観は男性によって固持されていることが分かる。規則が守られていることを監視しているのは男性であり、女性が家族の「名誉」に傷をつけたり、与えられた行動範囲から逃げ出そうとする際に、容赦なく罰を下したりするのも男性である。そのために、絶えずドイツの社会と衝突しているのも男性であるのだ。

名誉の名の下に女性を虐待したり殺したという理由によって今ドイツの刑務所に入っている男性たちと話をした。彼らは他の男性と殴りあったり、銃で撃ちあったりしていた。この本には、彼らの身の上話が収録されている。この調査によって、多くの場合「加害者」である彼らは、イスラーム教の家父長的な規則の「犠牲者」、融通の利かない古典的な男性像や（個人としての）決断の余地のない自己像の「犠牲者」に過ぎないことがわかる。⁴⁴

このように、イスラームのシステムによって抑圧されているのは、決して女性だけではないということが説明されている。ムスリムに対して語られる際、その多くが「犠牲者」として抑圧されているムスリム女性について、もしくは、「加害者」として抑圧するムスリム男性についてである。しかし、「加害者」として扱われがちなムスリム男性もまた、イスラームのシステムによって抑圧される可能性を有している「犠牲者」なのだ、ケレクは描写している。つまり、ここからも、イスラームの「多様性」という側面がうかがえる。「イスラームのシステムが抑圧しているもの＝女性」という偏った報告や描写だけではなく、イスラームのシステムとムスリム男性の関係性にも言及することによって、イスラームの新たな側面を発見することもできるのである。こういった意味において、「ムスリム女性関連書籍」としてひとくくりにしてしまうことの問題性を指摘できる。

また、この著書のタイトルに着目してみると、このタイトルは『新約聖書』の「ルカによる福音書」のたとえ話を引用していると考えられる。なぜ、あえてキリスト教の聖書からの引用なのか。ここには、ケレクのコーランとの距離間、イスラームに対する挑発、そして、再び「放蕩息子」が父親に許さ

れて帰ってくるという描写には、イスラームへの希望が表されていると言うことができる。さらに、宗教そのものが男性に与える影響をも示唆している。

一方、表紙の比較をしてみると、『外国人花嫁』は草と花柄模様の黒い布を手で掴んだ状態で、一面真っ黒な表紙となっている。おそらく、この黒い布は、ムスリム女性の多くが身につけるスカーフやニカブ、ブルカを象徴しているのであろう。これに対し、『放蕩息子』ではアラビア文字が書かれた真っ白な表紙である。これは、イスラームの聖典コーランの象徴のようである。黒と白という対照的な色調によって、ここにも女性と男性という正反対のテーマを扱った書籍の性質を浮き彫りにしている。しかし、正反対のテーマを扱っていても、共通する点は、イスラームである。このことも、表紙に表現されている。つまり、どちらの表紙にも、イスラームの代表的な象徴であるスカーフもしくはコーランを思わせるようなデザインとなっている。この正反対の黒と白の表紙で覆われた書籍が店頭に並んでいる様は、非常に目をひく。視覚的にも十分なインパクトを与え、販売戦略を考えてみても、その効果は十分である。

結論

在独トルコ系女性による著書はその内容を問わず、「移民女性による書籍」、もしくは、「ムスリム女性関連書籍」と位置づけられがちである。しかし、アテシュやケレク著書に見られるように、自伝、強制結婚や花嫁の輸入を含めたトルコのイスラームの伝統や日常の報告書、さらにはドイツ・トルコ・ヨーロッパの関係への言及などを含めた提言など、その内容や様式は多様である。特に、ドイツの並存社会におけるムスリム女性たちを取り巻いている生活環境を報告することは、「移民社会ドイツ」の現状を把握することにおおいに役立つ。在独トルコ人コミュニティの在り方とドイツ社会における理不尽さに対する疑問の投げかけもまた、在独トルコ人と移民を抱えるドイツ社会双方への示唆に富んでいる。つまり、ただの「自伝」であるわけでもなく、「報告書」ととどまるわけでもない。それゆえに、「ムスリム女性関連書籍」と軽視しがちな書物を再度捉えなおす必要がおおいにある。

注

- 1 本論文はベティーナ・ギルデンハルトと渡邊紗代の一年間の共同研究に基づき、共同執筆したものであるが、1～2章は主にギルデンハルト、3～5章は主に渡邊が担当した。
- 2 Ayşe: *Mich hat keiner gefragt. Zur Ehe gezwungen – eine Türkin in Deutschland erzählt*. Blanvalet, 2005.
- 3 Serap Çileli: *Wir sind eure Töchter, nicht eure Ehre*. Blanvalet, 2006.
- 4 Ayan Hirsi Ali: *Mijn Vrijheid*. Augustus, 2006. 英訳の題名は“Infidel”となっている。
- 5 森千香子「フランスの『スカーフ禁止法』論争が提起する問い」176頁、内藤正典編『神の法vs.人の法—スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社、2007年、156-180頁。
- 6 森 (2007)、177頁。
- 7 Seyran Ateş: *Der Islam braucht eine sexuelle Revolution. Eine Streitschrift*. Ullstein Taschenbuchverlag, 2009.
- 8 Necla Kelek: *Himmelsreise. Mein Streit mit den Wächtern des Islam*. Kiepenheuer & Witsch, 2010.
- 9 Seyran Ateş: *Große Reise ins Feuer. Die Geschichte einer deutschen Türkin*. Rowohlt, 2003. (3. Auflage, 2008.)
- 10 Ayşe und Devrim: *Wo gehören wir hin? Zwei türkische Mädchen erzählen*. Lamuv-Taschenbuchverlag, 1983. Hrsg. von Michael Kuhlmann und Alwin Meyer.
- 11 <http://lamuv.de> (2010/10/29閲覧)。
- 12 Günter Wallraff: *Ganz unten*. Kiepenheuer & Witsch, 1985. 邦訳『最底辺』は1987年に岩波書店から出版された。
- 13 西ドイツは深刻な人手不足のため、1955年のイタリアとの二国間協定を結んだ後、様々な国と協定を結んだ。トルコとは1961年に協定を結んでいる。
- 14 Ateş(2003): S.39.
- 15 Frauenladenは、女性解放運動にともなって差別を受けたり抑圧されたりする女性を助ける、または、解放運動を促進するために数多く設置された。ここでは男性の立ち入りを禁止している。
- 16 Ateş(2003): S.242.
- 17 Inci Y: *Erstickt an euren Lügen. Eine Türkin in Deutschland erzählt*. Piper, 2006. (5.Auflage, 2009.)
- 18 読者が女性の綴っている経験の「典型性」に興味を持っているという事情にはアヤーン・ヒルシ・アリが最新の著書“Nomad”(Simon and Schuster UK, 2010.)の中で

- 触れている。”Readers of *Infidel* all over the world have offered me a great deal of support and encouragement. But they have also asked me a number of questions that I did not address in that book. They asked about the rest of my family. They asked about the experiences of other Muslim women. Time and again I heard the question: How typical was your experience? Are you in any way representative?” (Nomad, Introduction xiii)
- 19 Ateş(2003): S. 218f.
- 20 在独トルコ人のコミュニティがドイツ社会と全く交流することなく、別の価値観を固持し生活をしていることを指している。直訳すれば「平行社会」だが、ここでは「共存」に相反するという意味を込めて「並存」という訳語を用いた。
- 21 Sigrid Weigel: *Die Stimme der Medusa. Schreibweisen in der Gegenwartsliteratur von Frauen*. Dülmen-Hiddingsel, 1995. S.143f.
- 22 Özdamarの作品に関して、浜崎桂子が詳しい分析を行っている。
- 23 例えばRowohl:「新しい女性 (neue frau)」、Fischer:「社会の中の女性 (Die Frau in der Gesellschaft) などがある。Luzia Vorspel: *Was ist neu an der neuen frau?*. Peter Lang, 1990. S.3.
- 24 Vorspel (1990): S.2.
- 25 詳しい紹介は杉田真由美「現代ドイツにおける強制結婚」、『移民研究年報』、2010年、Vol.16.
- 26 Necla Kelek: *Bittersüße Heimat*. Kiepenheuer & Witsch, 2009.
- 27 Necla Kelek: *Die fremde Braut*. Kiepenheuer & Witsch, 2005.
- 28 Necla Kelek: *Die verlorenen Söhne*. Kiepenheuer & Witsch, 2006.
- 29 Seyran Ateş: *Der Multikulti- Irrtum*. Ullstein, 2007. タイトルにあるドイツ語の「Irrtum」とは「誤り、間違い」という意味であるが、ここでは「多文化主義」や「多文化」に対して理想を抱きすぎているというアテシュの批判的な姿勢を考慮して、「幻想」という訳語を用いた。
- 30 Ateş (2007): S. 249.
- 31 Ateş (2007): S. 53.
- 32 Ateş (2007): S.59.
- 33 Ateş (2007): S. 214.
- 34 Ateş (2007): S. 251
- 35 Kelek (2005): S. 170.
- 36 Kelek (2005): S. 171 f.
- 37 例えば、spiegel onlineでの2007年10月30日の記事には、「ムスリム移民がドイツへの統合を失敗したことにこの著書の中で攻撃している。」と著書の説明をしている。<http://www.spiegel.de/kultur/gesellschaft/0,1518,509723,00.html> (2010/10/29閲覧)
- 38 *Die Welt* 24. 11. 2007.

- http://www.welt.de/welt_print/article1395510/Kurz_und_knapp.html (2010/10/29閲覧)
- 39 政治学者 Armin Pfahl-Traugber による書評。 <http://hpd.de/node/2974> (2010/10/29閲覧)
- 40 Der Spiegel 4 / 2005. S.59f.
- 41 Die Zeit 03.03.2005. Nr.10. <http://www.zeit.de/2005/10/Ehrenmorde> (2010/10/29閲覧)
- 42 Die Zeit 01.02.2006. Nr.6. <http://www.zeit.de/2006/06/Petition> (2010/10/29閲覧)
- 43 Die Zeit. 02.02.2006. Nr.6. http://www.zeit.de/online/2006/06/kelek_replik (2010/10/29閲覧)
- 44 Kelek (2006): S.24f.

付記

伊狩裕先生に様々な貴重なご助言を頂き、心から感謝しております。

ドイツ語での要約

Die Aktualität des Themas Immigration und Integration in Deutschland belegt u.a. die große Anzahl von Neuveröffentlichungen auf dem Büchermarkt. Besonders autobiografische Bücher muslimischer Frauen haben Konjunktur. Der vorliegende Aufsatz untersucht die pauschalisierenden Wahrnehmungsmuster, die sich bei der Rezeption dieser Texte entwickelt und dazu geführt haben, dass sich das Stereotyp von „der schwachen, unterdrückten Muslimin“ ausgebildet hat. Zugleich stellt er verschiedene Texte vor, die diesem Muster nicht entsprechen bzw. sich bewusst davon abgrenzen. Im Mittelpunkt der Untersuchung stehen die Veröffentlichungen der beiden bekannten Islamkritikerinnen Seyran Ateş und Necla Kelek. Die Analyse ihrer Monografien demonstriert nicht nur die Vielseitigkeit von Texten muslimischer Frauen. Sie gewährt auch tiefe Einblicke in verschiedene Aspekte der türkischen Parallelgesellschaft sowie in die Integrationsdebatte in Deutschland.

The Literary Activism of Women of Turkish Descent in Germany and its
Reception: Seyran Ateş and Necla Kelek

Keywords: female immigrants, self expression, representation